

だいもんばら
大門原遺跡Ⅱ

2001年3月

長野県飯田市教育委員会

だいもんばら
大門原遺跡Ⅱ

2001年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市座光寺地区は、飯田市街地の北に位置し、木曾山脈の麓から天竜川まで広がる大きな扇状地上に立地しています。

このような地形を利用して、私たちの祖先は生活を営み、その痕跡が遺跡として現代に残されてきています。これらは私達の地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のまま後世に伝えていくことが私たちの責務であります。

座光寺地区は、国道153号バイパスや県道に沿った場所から、近年住宅化が進みつつあり、県道バイパスやふるさと農道などの道路整備も進行しています。今次調査箇所も、このふるさと農道の一面に当たります。この一帯には、学史に知られた大門原遺跡があり、前回の調査でも縄文時代の集落跡が確認されております。このため、関係各機関と協議の結果、工事実施に先立って発掘調査を行って、記録保存を図ることとなりました。

調査結果については本文に述べてあるとおりでありますが、今回の調査では、縄文時代早期の調理をした場所ともいえる集石土抗が多数見つかかり、当時の生活の様子が明らかになりました。調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料になると確信しています。

最後になりましたが、調査の実施に当たり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた近隣地域の方々をはじめ、調査に関係されたすべての皆様方に深く感謝申し上げます。

平成13年3月

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰啓

例 言

1. 本書はふるさと農道整備事業（座光寺地区）に先立ち実施された、長野県飯田市座光寺大門原所在の埋蔵文化財包蔵地大門原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市産業経済部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成11年度に現地作業、平成12年度に整理作業・報告書刊行を行った。
4. 調査にあたり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡番号としてDMHを一貫して用いた。遺構には、以下の略号を用いた。住居址・SB 集石土抗・SI 土坑・SK 柱列・SA 溝址・SD
6. 本書の記載については、住居址・集石土抗・土坑の順とした。
7. 土層観察については主に、小山正忠・竹原秀雄 1996 「新版標準土色帳」を用いた。
8. 本書の執筆は第I・II章を伊藤尚志が、その他を下平博行が担当した。また、編集は調査員の協議により、下平が行った。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により下平が行った。
10. 本書の遺構図の中に記した数字は検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に関連した出土遺物及び図面・写真類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序	
例言	
目次	
第I章 経過	
1. 調査に至るまでの経過…………… 1	
2. 調査の経過…………… 1	
3. 調査位置・調査区の設定…………… 1	
4. 調査組織…………… 2	
5. 調査の概要…………… 2	
第II章 遺跡の環境	
1. 自然環境…………… 3	
2. 歴史環境…………… 3	
第III章 調査結果	
1. 縄文時代早期の住居址・竪穴状遺構…………… 5	
2. 縄文時代早期の集石土抗…………… 5	
3. 土抗…………… 7	
4. 柱列……………10	
5. 溝址……………10	
6. 炭化物・礫集中箇所……………11	
7. 周辺ピット……………11	
第IV章 総括	
1. 縄文早期後半の集石土抗群について……………15	
2. 出土遺物について……………16	
3. 結語……………16	
報告書抄録	
写真図版	

第I章 経 過

1. 調査に至るまでの経過

平成5年、飯田市役所耕地課から、ふるさと農道整備事業の一環として、飯田市座光寺の上段部において、上郷町・高森町を結ぶ農道整備計画が提示され、埋蔵文化財包蔵地大門原遺跡が路線計画内に含まれることが判明した。このため、平成5年3月8日に長野県教育委員会文化課・飯田市耕地課・飯田市教育委員会の3者による保護協議を実施した。その結果、事前に試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認された場合、飯田市教育委員会において発掘調査を実施し、記録保存を計ることとなった。

保護協議に基づき平成8年7月1日から平成9年2月28日にかけて一次調査を実施し、平成10年度に報告書を刊行した。その後、平成11年4月26日付け 11飯産第153号で平成7年調査区の延長線上での埋蔵文化財発掘の通知が提出されたため、飯田市産業経済部と飯田市教育委員会で協議し、対象地全域について試掘調査を行い、遺構の存在が確認された場合、本発掘調査を実施し完全な記録保存を計ることとなった。諸協議に基づき、平成11年5月11日、大門原遺跡埋蔵文化財発掘調査（試掘）委受託契約を締結し、平成11年8月17日から試掘調査に着手した。その結果、縄文時代の集石炉・土抗など多数の遺構が確認されたため、協議に基づき、平成11年9月13日付けで飯田市産業経済部と飯田市教育委員会の2者による大門原遺跡埋蔵文化財発掘調査（本調査）委受託契約を締結し、平成11年9月29日より本調査に着手した。

2. 調査の経過

路線計画図に基づき、9月29・30日と重機による表土除去・抜根作業を行い、10月4日から作業員を入れて発掘調査に着手した。人力による荒れ土除去等後、(株)ジャステックによる委託基準点測量の後、住居址・集石炉・土坑・溝などを検出し、遺構の掘り下げ作業は必要に応じて図面を取りながら進められ、その後個別の写真撮影・測量調査を行った。平成11年12月1日、現地での発掘作業を終了し、重機による埋め戻し・復旧作業をおこなった。

平成12年度は飯田市考古資料館において図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗い・注記・復元・実測を行い、本報告書を刊行した。

3. 調査位置・調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した。調査地点は、LC65 21 に位置する。

4. 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助（平成11年12月24日まで）
富田泰啓（平成11年12月25日から）
調査担当者 下平博行・佐々木嘉和

作 業 員 岡田直人・伊藤祐子・小島康夫・田中 薫・中村地香子・樋本宣子・福沢トシ子
正木実重子・松下省三・松下博子・柳沢謙二

(2) 指導 長野県教育委員会

(3) 事務局

飯田市教育委員会

教育次長 久保田裕久

博物館課長 小畑伊之助(平成11年度) 米山照実(平成12年度～)

埋蔵文化財係長 小林正春

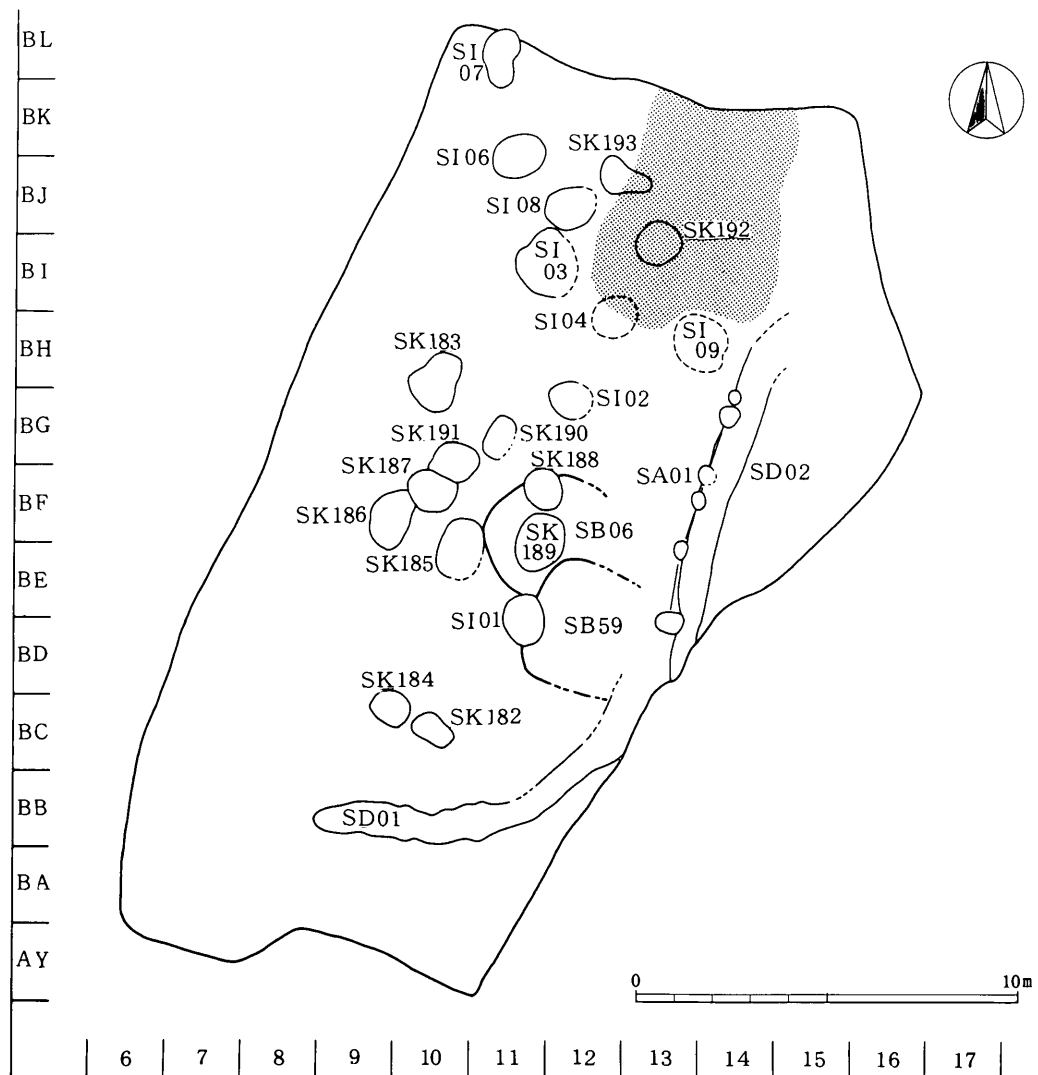
埋蔵文化財係 馬場保之・澁谷恵美子・吉川金利・下平博行・伊藤尚志・福沢好晃・坂井勇雄

庶務係長 麦島 博晴(平成11年度)・今村 進(平成12年度～)

庶務係 牧内 功(平成11年度)・松山登美子(平成12年度～)

5. 調査の概要(挿図1・2)

今次調査区は飯田市座光寺7番地の現状山林である。試掘調査の結果、遺構が確認された箇所を中心に、およそ310㎡が調査対象とした。確認された遺構は縄文時代早期後半の住居址2軒・集石土抗8基・土抗13基・溝址2条・ピット多数で、遺物は縄文時代早期後半の条痕文系土器・石器が主体となった。



挿図1 全体図

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市は伊那山脈と木曾山脈に挟まれた伊那盆地（通称 伊那谷）の南端にあたり、盆地の中央には天竜川が南流する。天竜川両岸には典型的な河岸段丘が連続し、また山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

大門原遺跡の所在する飯田市座光寺地区は市街地の北東約4km、飯田市の北端に位置する。北東は下伊那郡高森町、南東は天竜川を挟んで喬木村、南西は飯田市上郷地区と接する。座光寺地区の場合、断層運動で作られた段丘で大きく上段と下段に分けられる。上段は木曾山脈の山裾から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等による微地形の変化が著しい。一方、下段は数段の小段丘からなり、恒川遺跡群が立地する上位の段丘面の場合、北側は南大島川から扇状地が発達するのに対し、南側は比較的段丘面がよく残る複雑な微地形を呈する。

大門原遺跡は座光寺地区上段の北西端に立地する。南大島川を挟んで対岸は下伊那郡高森町となる。本遺跡は北側を流れる南大島川の開析による扇状地全体に広がると推定され、扇状地南側には小河川の開析による溝状の湿地と思われる窪みがみられる。遺跡背後に当たる北西には小規模な扇状地が形成され大門原山遺跡が所在する。南東扇端部は弥生時代の標識遺跡である座光寺原遺跡に、北東側は南大島川に向かい緩やかに傾斜し大久保遺跡に続く。

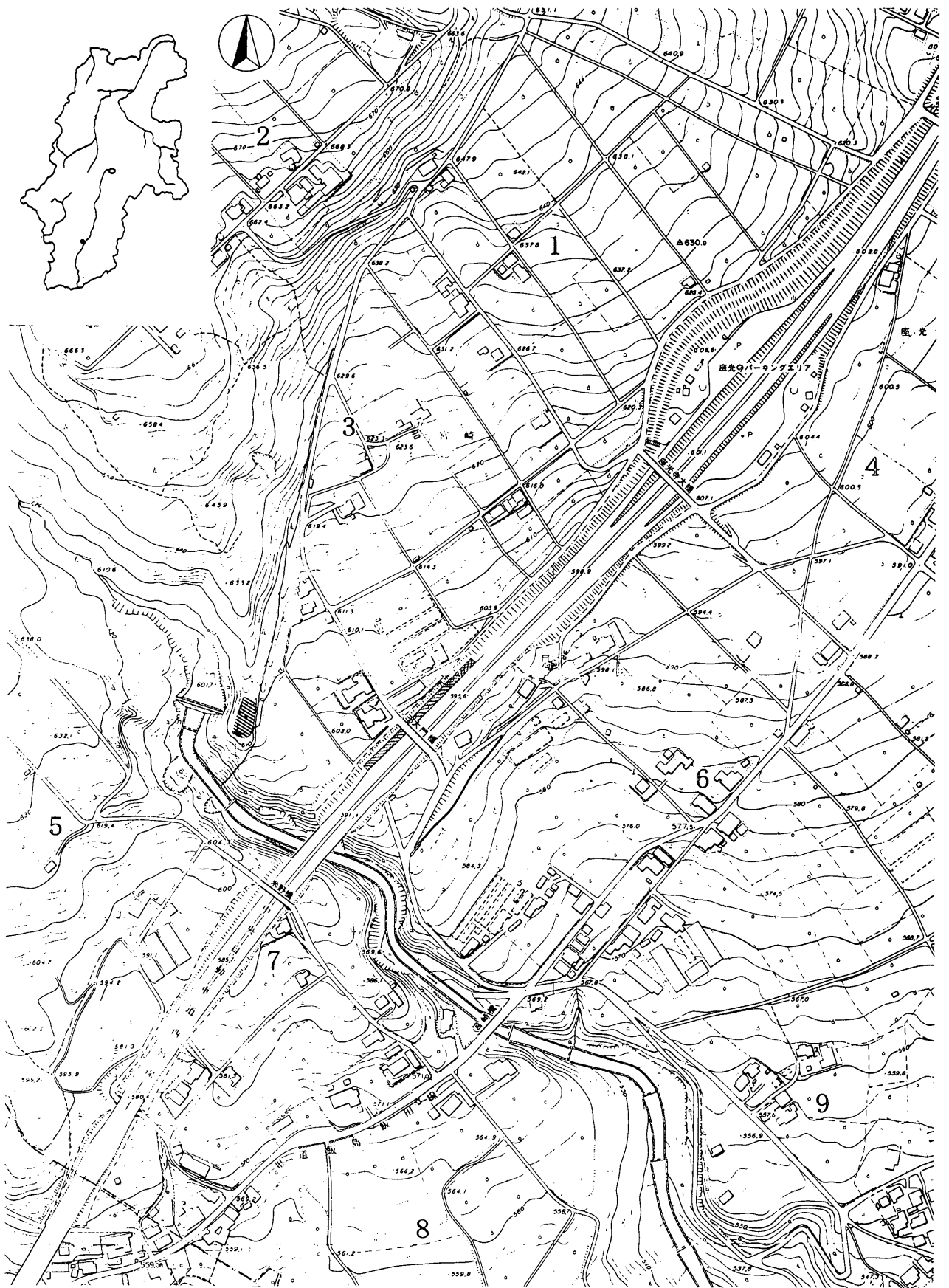
今次調査地点は、平成8年度の調査地点から南西におよそ600m離れた、土曾川の浸食崖を望む大門原遺跡の南西端に当たる。現地は果樹園地帯を見下ろす雑木林である。

2. 歴史環境

座光寺地区は前述した地形的特徴から、各段丘崖下及び扇状地扇端からの豊富な湧水等を背景に縄文時代草創期から中世にかけての多くの遺跡が分布しており、調査事例も多い。

当地区における最も古い遺跡は美女遺跡で、土坑内より縄文時代草創期の「爪形文土器」が出土している。これは飯田市内においても、最も古い時期の遺構・遺物として挙げられる。当地区のこれまでの発掘調査における出土遺物から、縄文時代早期後半には既に東海地方と密接な関係にあったことが窺われる。縄文時代前期後半には関東・関西双方の影響も受け始めたようであるが、同中期後葉になると当地域は独自性を強める。弥生時代前期・中期前半の資料は極めて断片的であるが、中期後半では恒川遺跡群一体に、後期になると上段にも集落は広がりを見せる。特に座光寺原遺跡・中島遺跡は当該期の標識資料として型式設定されている重要な遺跡である。

座光寺地区は市内で竜丘・松尾地区に次ぎ古墳の多い地域で、古墳時代から重要な地域であったことが窺われるが、奈良時代には伊那郡衙が設置される。国道153号バイパス建設に先立つ発掘調査において、大型掘立柱建物址や特殊な遺物の確認された恒川遺跡群が古代伊那郡衙所在地と認定された。以後、毎年確認調査が実施されており、平成6年度には郡衙の正倉が確認されている。しかし、恒川遺跡群は平安時代以後、一般集落へと変貌していく。以上、座光寺地区の変遷を簡単に述べてきたが、詳しくは1999年 飯田市教育委員会刊行「大門原遺跡」に触れられているので参考にさせていただきたい。



- | | | |
|-----------|-----------|---------|
| 1. 大門原遺跡 | 2. 大門原山遺跡 | 3. 死人塚 |
| 4. 座光寺原遺跡 | 5. 米の原遺跡 | 6. 南原遺跡 |
| 7. 宮崎上遺跡 | 8. 宮崎下遺跡 | 9. 松林遺跡 |

0 250m

挿図2 調査位置及び周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査結果

1. 縄文時代早期の住居址・竪穴状遺構（S B）

①住居址59（S B59）（挿図3）

BE-12グリットを中心に検出された。東側隅がS D01に、西側中央壁がS I01に切られている。1辺3.5m程度の隅丸方形を呈すると推定され、西壁隅に2箇所柱穴が確認された。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦で部分的に堅い箇所がみられた。検出面から覆土中にかけて、チャート・黒曜石等の剥片が多数出土し、縄文時代早期の条痕文系土器片および石匙が少数みられた。

②竪穴状遺構60（S B60）（挿図3）

BF-11グリットを中心に検出された。南東部分をS B59に、中央部をS K189に、北側をS K188にそれぞれ切られている。直径4m程度の円形もしくは楕円形を呈すると推定される。壁は緩やかに立ち上がり床面は平坦で軟弱である。S B59と同様にチャート・黒曜石の剥片類の散布が認められたが、床面からは遺物が出土しておらず、住居址の可能性は低い。

2. 縄文時代早期の集石土抗（S I）

①集石土抗01（S I01）（挿図3）

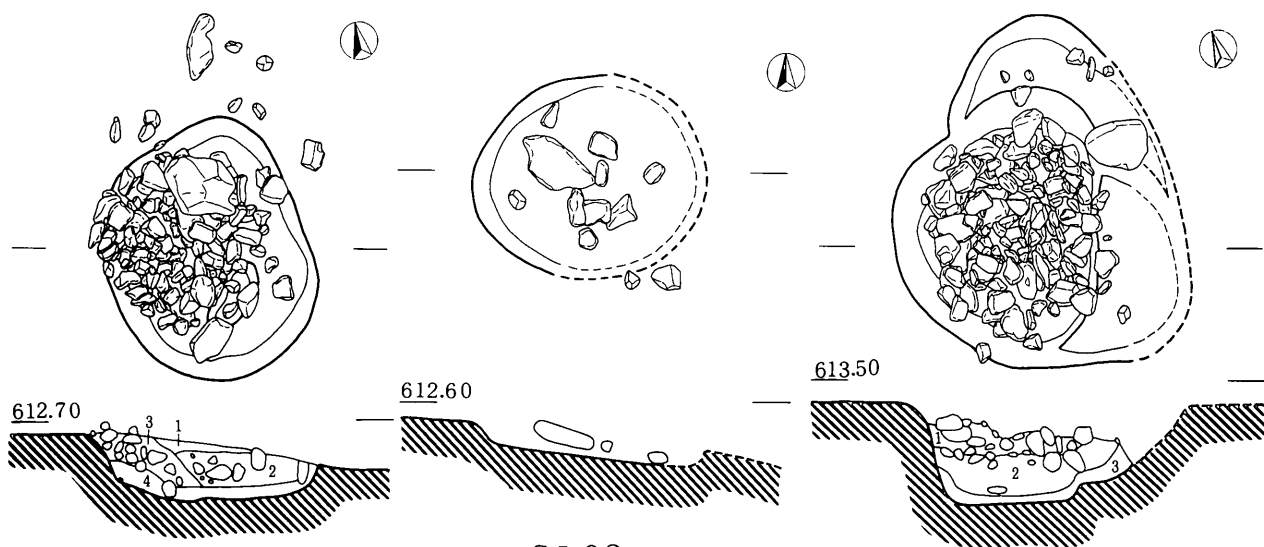
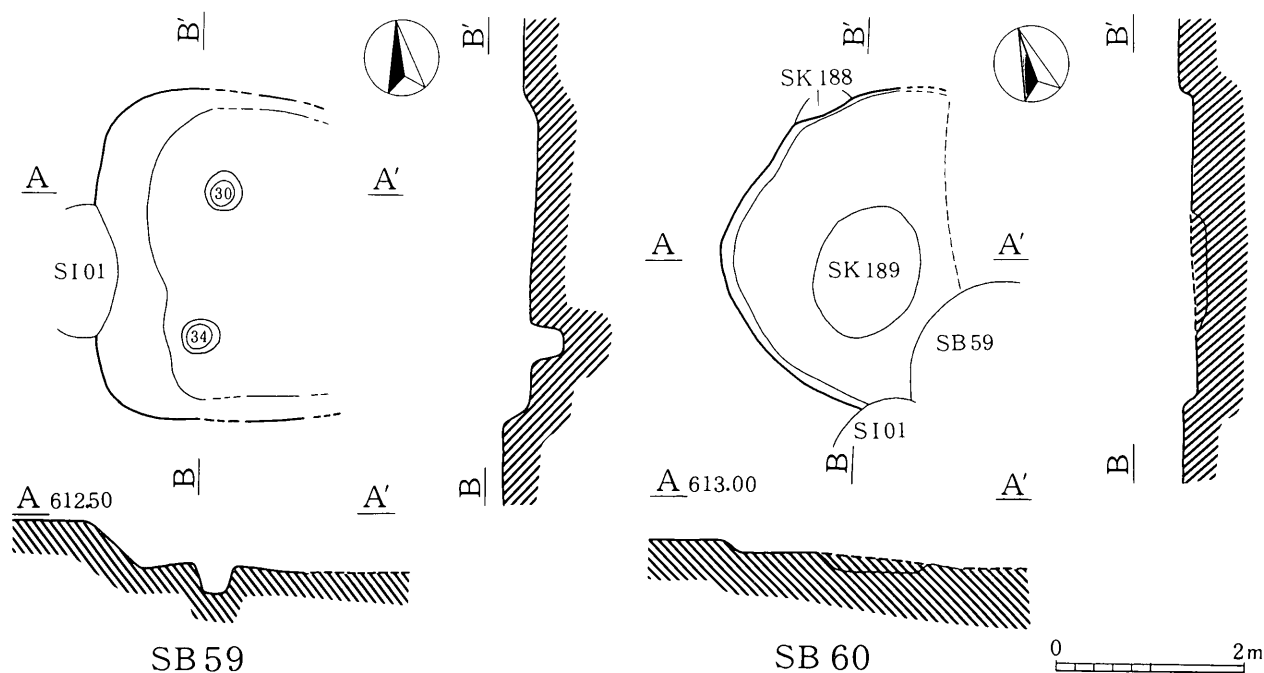
BE-11グリットを中心に検出された。長径1.3m程度の楕円形の掘り込みが認められ、検出面から底面まではおよそ30cm程度である。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦になる。掘り込み中には総数210個の礫がみられ、最大の礫で22.4kg・最小の礫で40gを測り、総重量は約154kgである。構成礫は、いずれも赤化しており、検出面から底面にかけて炭化物・焼土が多量に認められた。遺物は覆土1層中から縄文時代早期の条痕文系土器が出土している。

②集石土抗02（S I02）（挿図3）

BH-14グリットを中心に検出された。長径1m程度の楕円形の浅い掘り込みが認められ、底面まではおよそ10cmである。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。掘り込み中には総数13個の礫がみられ、最大の礫で約10kg・最小の礫で300gを測り、構成礫総重量は18kgである。いずれも赤化がみられるが破碎礫は少ない。覆土中には炭化物粒が少数みられた。出土遺物はない。

③集石土抗03（S I03）（挿図3）

BI-12グリットを中心に検出された。北側に重複する箇所がみられることから集石炉が重複した可能性がある。礫が集中する箇所は長径1.3m程度の楕円形の掘り込みが認められ、底面まではおよそ50cmである。断面形は逆台形と推定され、底面はほぼ平坦である。掘り込み中には総数174個の礫がみられ、最大の礫で約14kg・最小の礫で40gを測り、構成礫総重量は176kgである。いずれも赤化がみられ、破碎礫も認められる。礫は底面に及ぶものが少なく、覆土上層に集中する。覆土中には炭化物が多量にみられ、底面付近は焼土が多量にみられる。出土遺物はない。



- 1層 10YR6/2 灰黄褐色 炭化物少量
- 2層 7.5YR5/4 灰黄褐色 土器含む
- 3層 10YR3/1 黒褐色 炭化物層
- 4層 10YR7/4 に近い黄褐色 焼土層

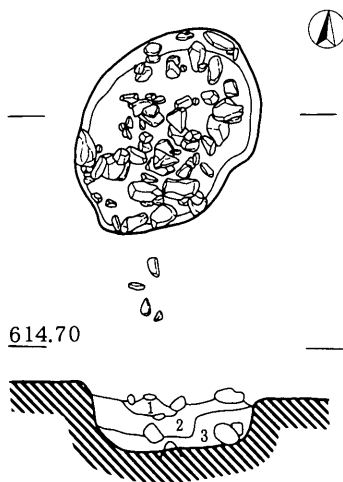
- 1層 10YR5/2 灰褐色 磁多数 炭化物少量
- 2層 10YR2/1 黒 炭化物層
- 3層 10YR6/6 黄褐色 焼土層

SI 01

SI 03

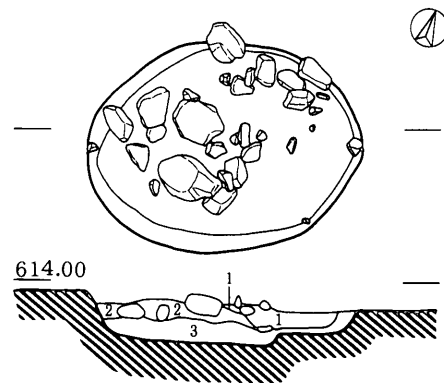


SI 04



SI 07

- 1層 10YR3/3 暗褐色 炭化物少量
- 2層 10YR4/6 褐色 炭化物少量
- 3層 10YR5/8 黄褐色 焼土・炭化物



SI 06

- 1層 10YR3/1 黒褐色 炭化物少量
- 2層 10YR4/3 に近い黄褐色 磁多数
- 3層 10YR5/6 黄褐色 焼土・炭化物

0 1m

挿図3 SB 59・60 SI 01~07

④集石土抗04（S I04）（挿図3）

BH-12グリットを中心に検出された。掘り込みは認められず、礫はほぼ同レベルで散布していた。総数22個の礫がみられ、いずれも赤化がみられるが破碎礫は少ない。礫周囲には炭化物が少量分布していた。出土遺物はない。

⑤集石土抗06（S I06）（挿図3）

BK-11グリットを中心に検出された。長径1.4m程度の楕円形の掘り込みが認められ、底面まではおおよそ30cmである。断面形は逆台形で、底面は東側に段がみられる。掘り込み中には総数29個の礫がみられ、最大の礫で約8kg・最小の礫で70gを測り、構成礫総重量は56kgである。平均重量が1.9kgと他の集石炉に比べ大型の礫を用いている。いずれも赤化がみられ、破碎礫も認められる。覆土上層には炭化物がみられ、下層は焼土が主体となる。出土遺物はない。

⑥集石土抗07（S I07）（挿図3）

BL-11グリットを中心に検出された。長径1.2m程度の楕円形の掘り込みが認められ、底面まではおおよそ30cmである。断面形は長方形で、底面はほぼ平坦である。掘り込み中には総数64個の礫がみられ、最大の礫で約3kg・最小の礫で30gを測り、平均重量700gで構成礫総重量は46kgである。いずれも赤化がみられ、破碎礫も認められる。覆土上層から下層にかけて炭化物・焼土が少量みられた。出土遺物はない。

⑦集石土抗08（S I08）（挿図4）

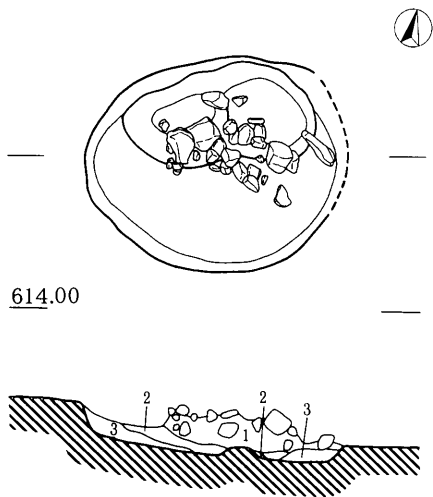
BJ-12グリットを中心に検出された。長径1.3m程度の楕円形の掘り込みが認められ、北半分は2段になる。底面まではおおよそ20cmである。断面形は逆台形で、底面には凹凸が見られる。掘り込み中には総数35個の礫がみられ、最大の礫で約4kg・最小の礫で10gを測り、平均重量600gで構成礫総重量は22kgである。いずれも赤化がみられ、破碎礫も認められる。覆土上層には炭化物が集中し、下層には焼土が少量認められた。出土遺物はない。

⑧集石土抗09（S I09）（挿図4）

BH-14グリットを中心に検出された。長径1.5m程度の円形の掘り込みが認められ、底面まではおおよそ30cmである。断面形は船底形で、底面はやや東側に傾斜し、凹凸が見られる。掘り込み中には総数77個の礫がみられ、最大の礫で約19kg・最小の礫で50gを測り、平均重量1.2kgで構成礫総重量は96kgである。いずれも赤化がみられ、破碎礫も認められるが、礫は散漫な分布を示す。覆土上層には炭化物の集中箇所が見られ、下層には炭化物混じりの焼土が少量認められた。出土遺物はない。

3. 土抗（SK）（挿図4・5）

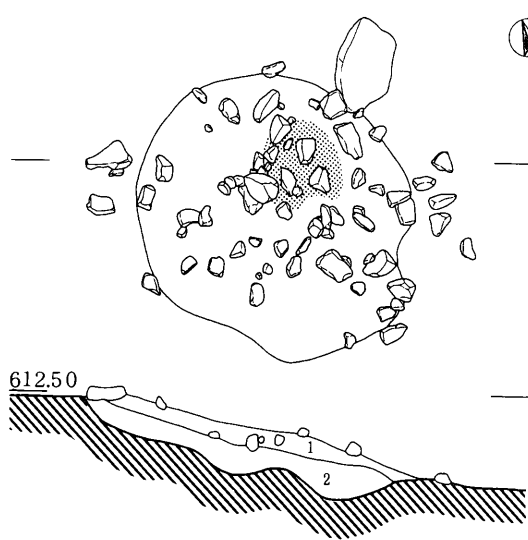
今次調査区からは総数12基の土抗が確認されている。形態は楕円形或いは不整形のものが多く、木痕と推定されるものが多い。この中でもSK182・183からは少量の焼土・炭化物粒・土器が出土しており集石炉の残痕の可能性はある。個々のデータは各実測図に記した。



614.00

1層 10YR3/2 黒褐色 炭化物・礫多数
2層 10YR3/1 黒褐色 炭化物層
3層 10YR4/6 褐色 炭化物少量

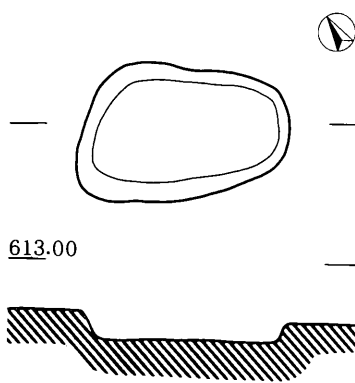
SI 08



612.50

1層 10YR3/1 黒褐色 炭化物層
2層 10YR3/3 暗褐色 炭化物少量

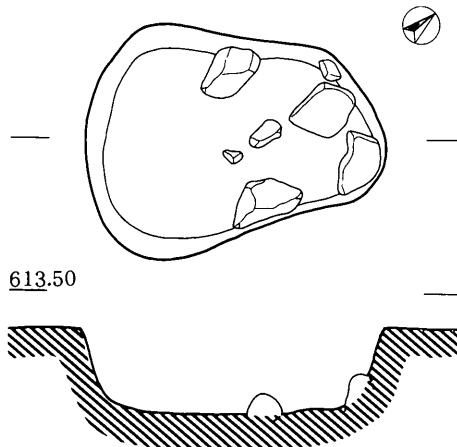
SI 09



613.00

平面形状 楕円形
長径×短径 105×71cm
深さ 15cm
検出位置 BC-10

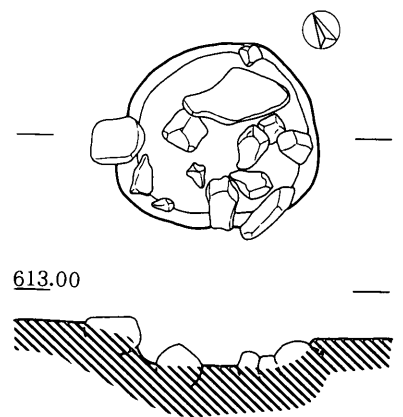
SK 182



613.50

平面形状 不整形
長径×短径 153×122cm
深さ 42cm
検出位置 BH-10

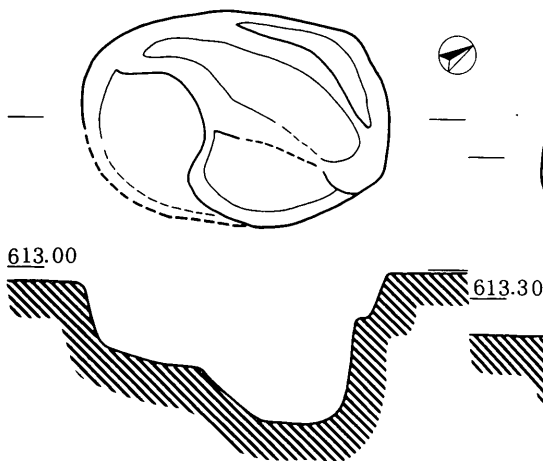
SK 183



613.00

平面形状 円形
長径×短径 108×97cm
深さ 22cm
検出位置 BC-10

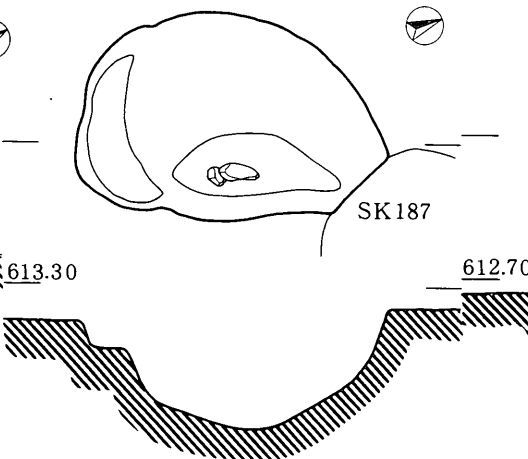
SK 184



613.00

平面形状 楕円形
長径×短径 159×113cm
深さ 78cm
検出位置 BF-10

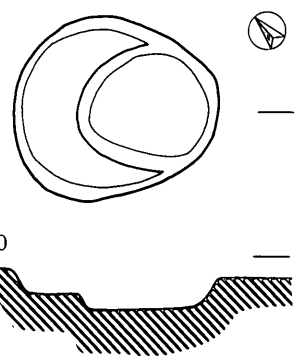
SK 185



613.30

平面形状 不整形
長径×短径 →×110cm
深さ 62cm
検出位置 BF-09

SK 186



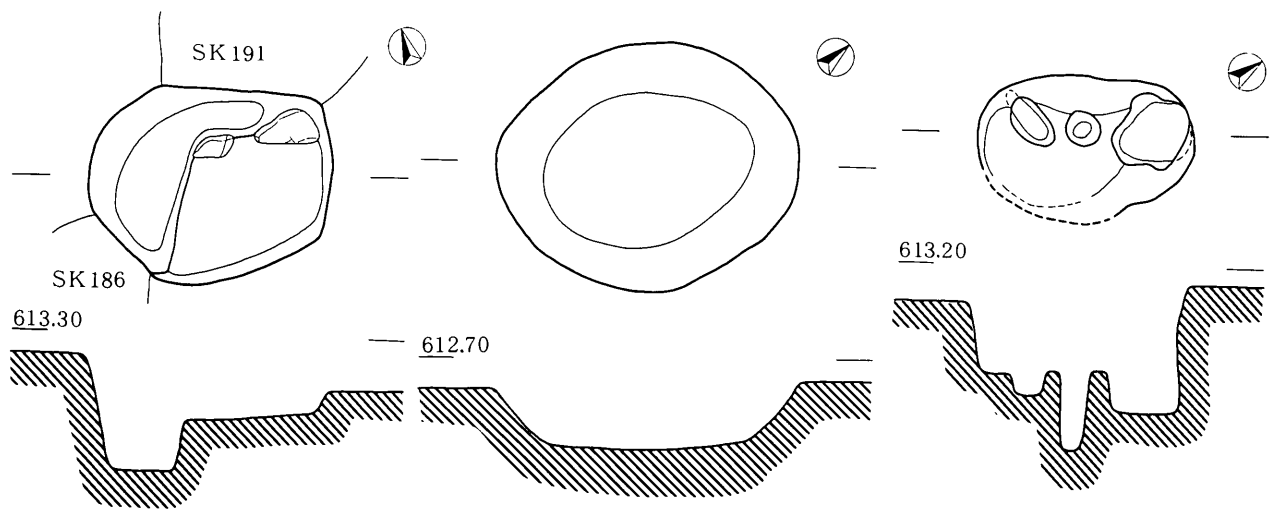
612.70

平面形状 円形
長径×短径 108×100cm
深さ 20cm
検出位置 BF-12

SK 188

0 1m

挿図4 SI 08・09 SK 182~188



平面形状 梯形
 直径×短径 125×100cm
 深さ 60cm
 検出位置 BF-10

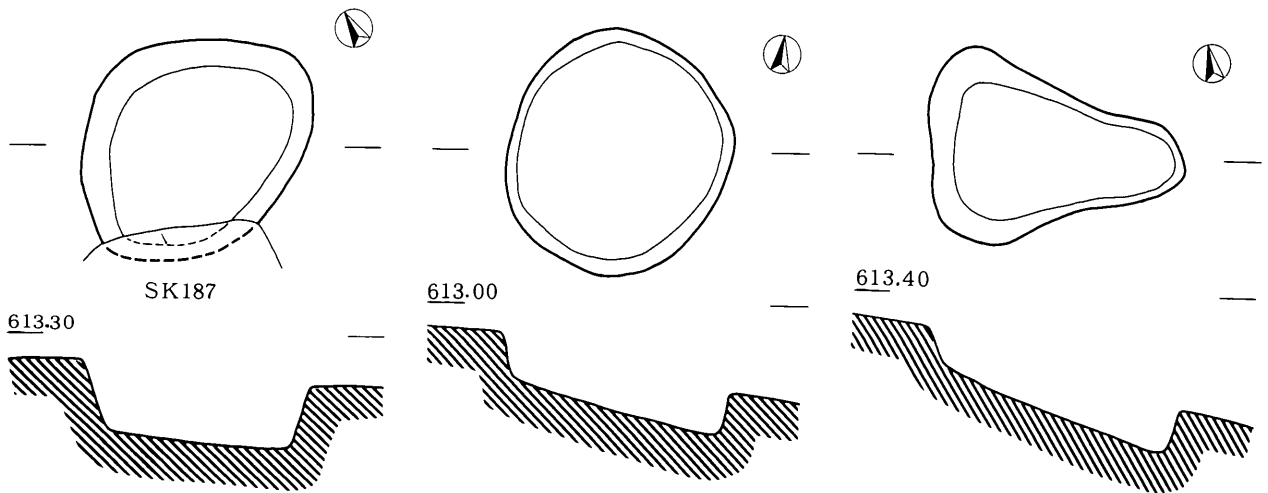
平面形状 圆形
 直径×短径 158×129cm
 深さ 36cm
 検出位置 BF-11

平面形状 梯形
 直径×短径 112×76cm
 深さ 85cm
 検出位置 BG-11

SK 187

SK 189

SK 190



平面形状 不整形
 直径×短径 140×111cm
 深さ 40cm
 検出位置 BG-10

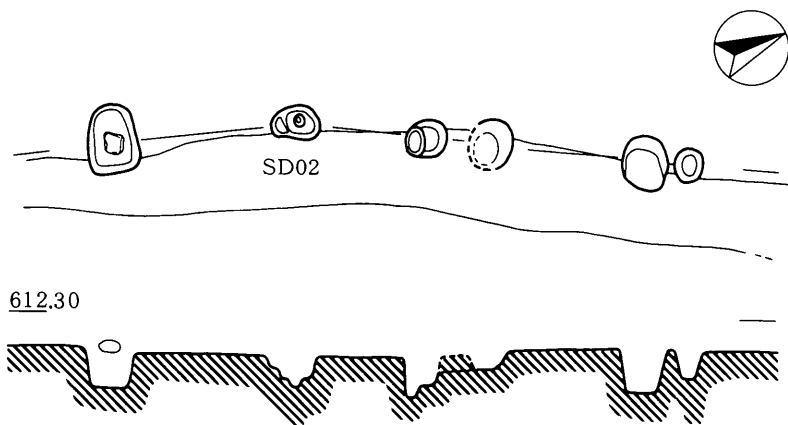
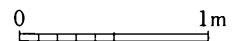
平面形状 円形
 直径×短径 130×110cm
 深さ 25cm
 検出位置 BJ-13

平面形状 不整形
 直径×短径 132×104cm
 深さ 25cm
 検出位置 BJ-13

SK 191

SK 192

SK 193



SA 01

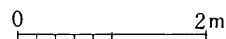
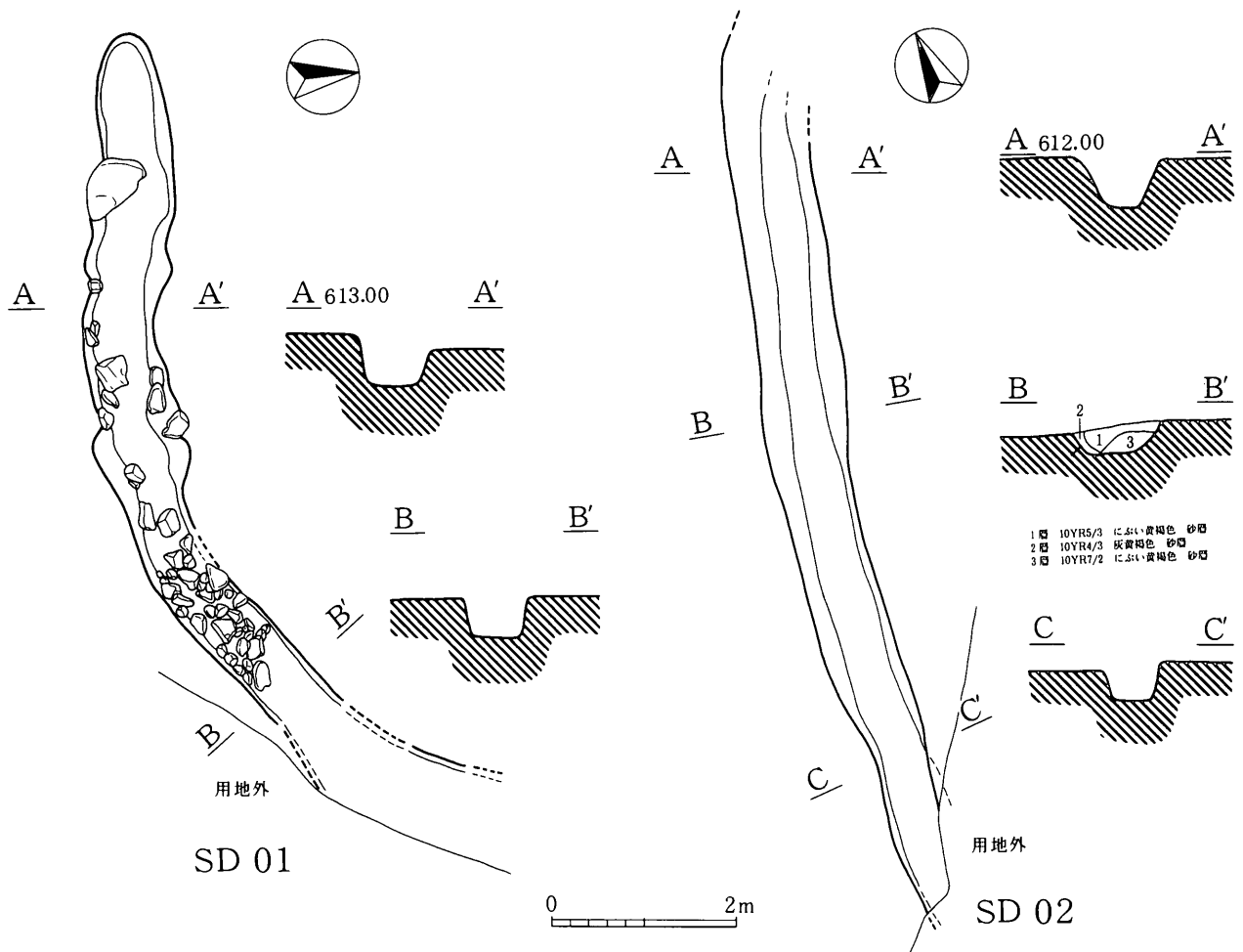


插图5 SK 187~193 SA 01



挿図6 SD01・02

4. 柱列 (S A)

①柱列01 (S A01) (挿図5)

調査区東側BE-13グリットからBH-14グリットにかけて検出された。SD02にほぼ併行して6個の柱穴が確認されており、一部SDを切っている。柱穴は近接している箇所も見られ、建て替えの可能性もある。また栗石と考えられる礫が内部に見られるピットや、柱痕の見られるものもある。覆土はいずれも黒色土で、その形態から中世の建物址の一部と推定される。

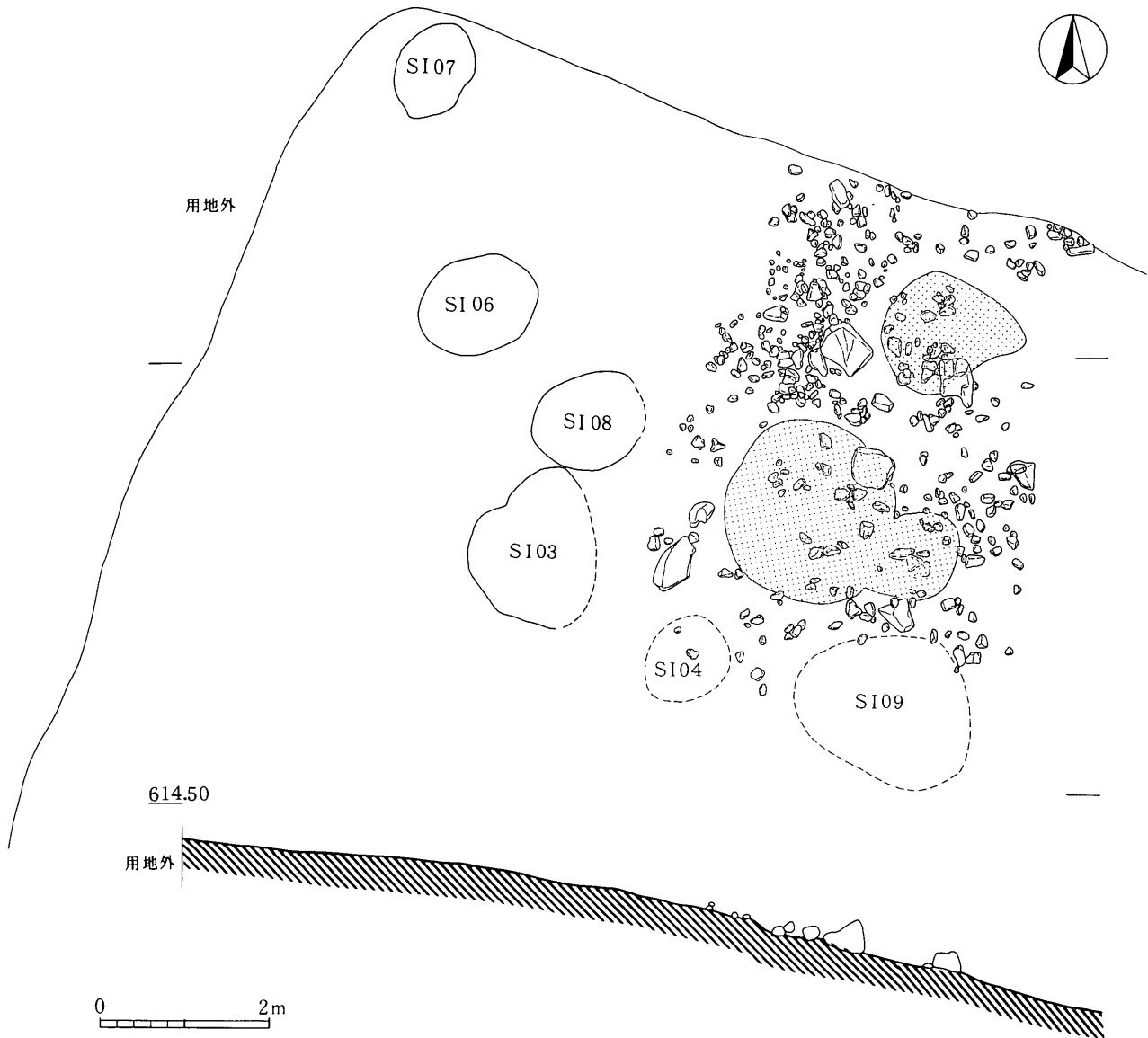
5. 溝址 (S D)

①溝址01 (S D01) (挿図6)

調査区南端、BB-9グリットからBC-13グリットにかけて検出された。東側が用地外に延びると推定される。調査区内の全長は約10mで、平面形は弧状になる。幅70cm・深さ40cmを測り、断面形は逆台形をなす。底面に分布する礫は地山のもので、砂等の堆積は認められず、遺物も出土していない。

②溝址02 (S D02) (挿図6)

調査区東端、BE-13グリットからBH-15グリットにかけて検出された。一部S A01に切られ、南北に調査区外へ連続する。全長はおよそ10mで、幅0.6~1m・深さ50cmを測り、断面形は逆台形あるいは船底形となる。覆土は3層で、砂が主体となり、水路の性格が推定される。遺物は出土していない。



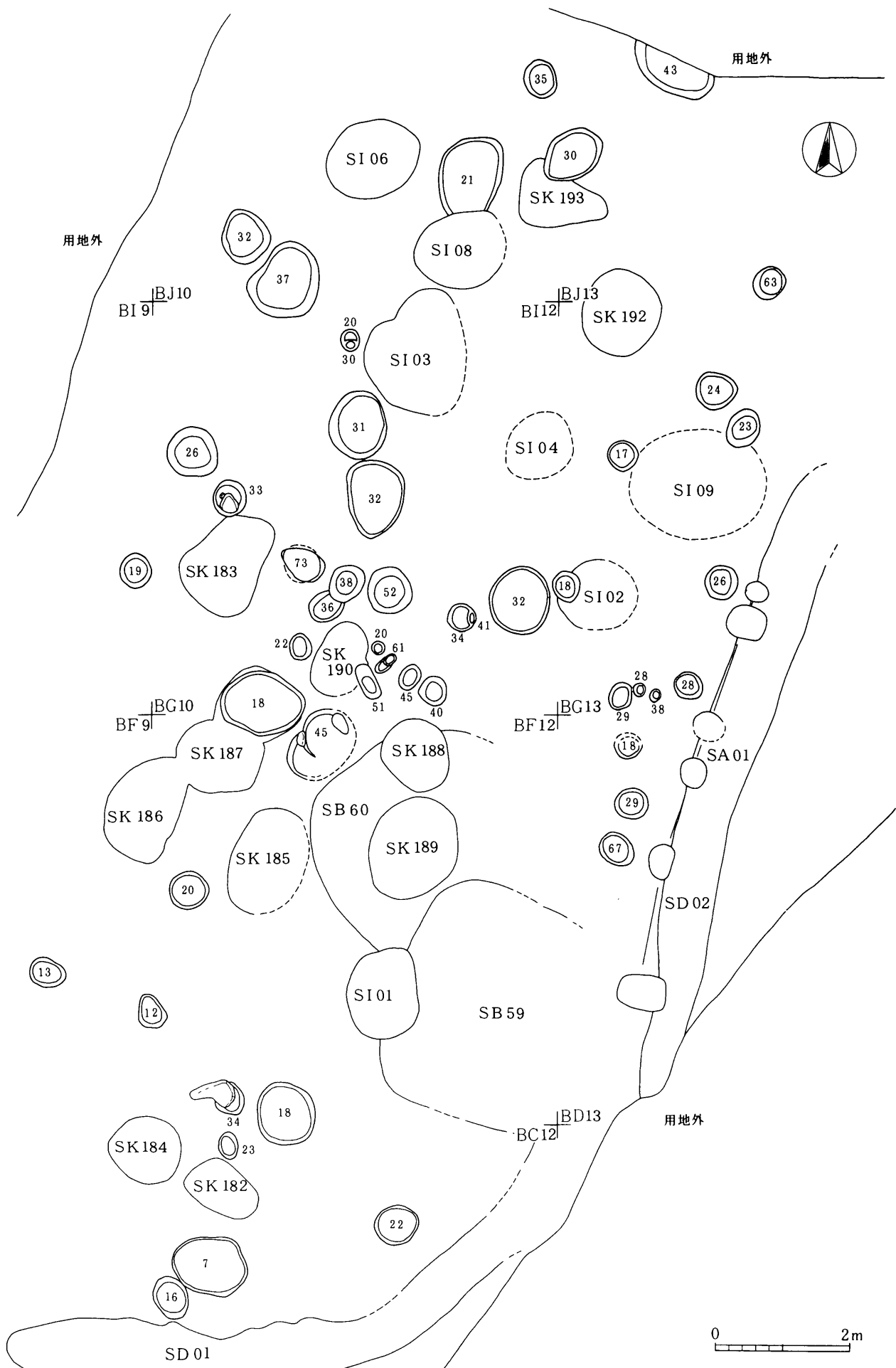
挿図7 炭化物・礫集中箇所

6. 炭化物・礫集中箇所（挿図7）

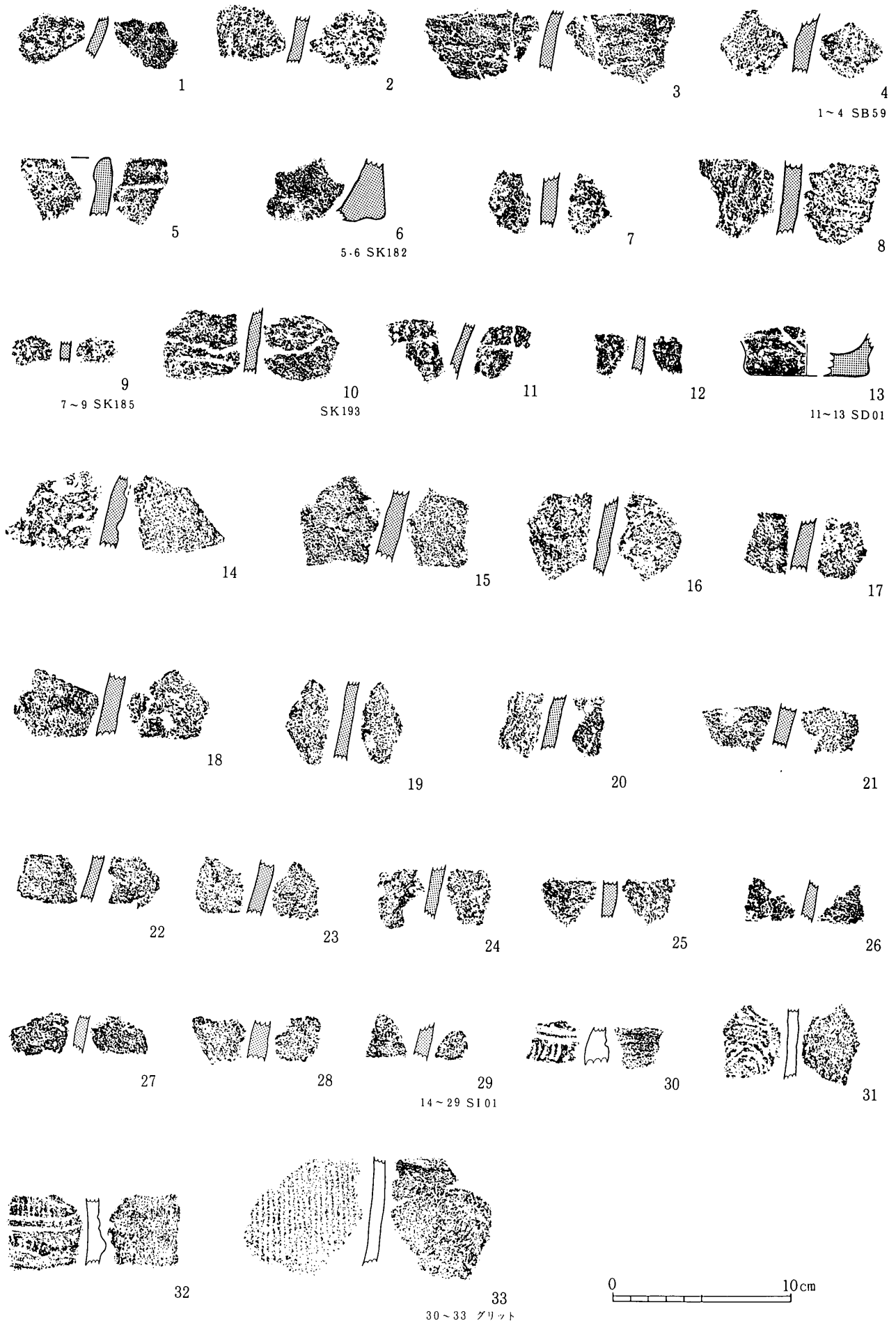
調査区北側、BH-13グリットからBL-13グリットにかけて、およそ4×6mの範囲で炭化物・礫の集中箇所を確認した。赤化が認められる礫が多く、長径70cmの大型の礫から拳大のものまで多数が万遍なく分布していた。礫中には炭化物・灰等の堆積が見られ、2～3箇所ほどの炭化物集中域が確認されたが、掘り込みは認められなかった。集中箇所は西から東にかけての傾斜が認められ、傾斜の上位には集石炉が6箇所集中することから、集石炉の礫及び灰の廃棄箇所であった可能性を指摘できる。

7. 周辺ピット（挿図8）

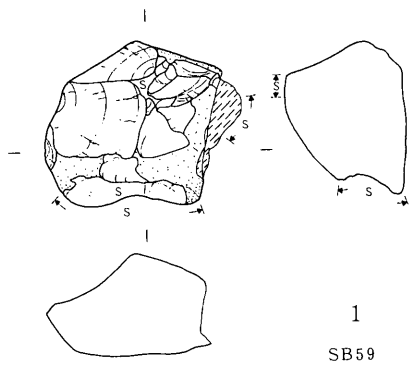
調査区全域から48個のピットが確認された。形状は円形・楕円形のものが多く、規模は20cm～1m近いものも見られる。ピットの配置には規則性が見られず、出土遺物もないため、大半が風倒木痕などの自然営力によるものと推定される。



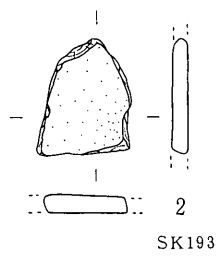
挿図 8 周辺ビット図



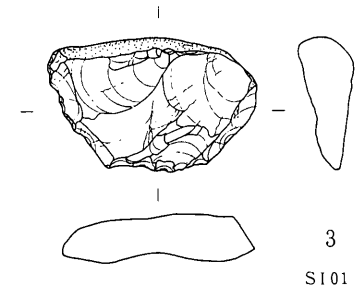
挿図9 出土遺物(1)



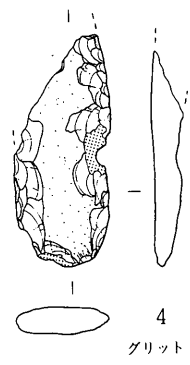
1
SB59



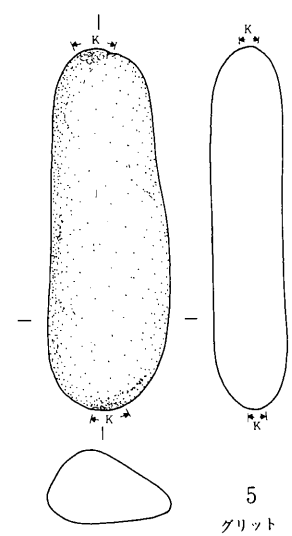
2
SK193



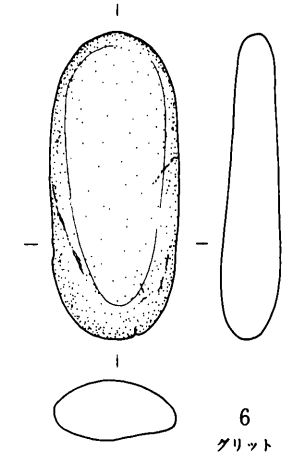
3
S101



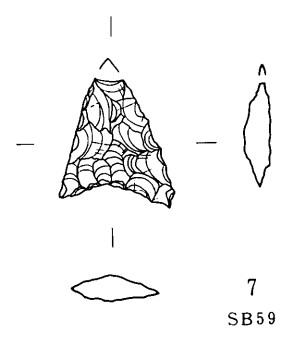
4
グリット



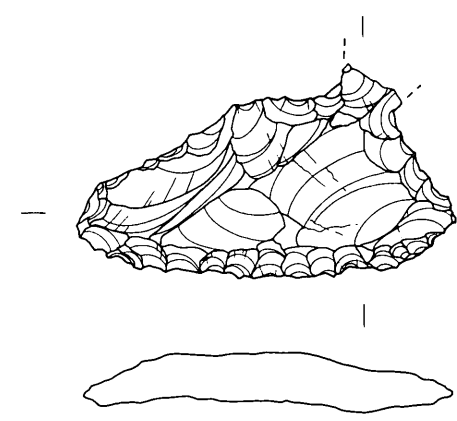
5
グリット



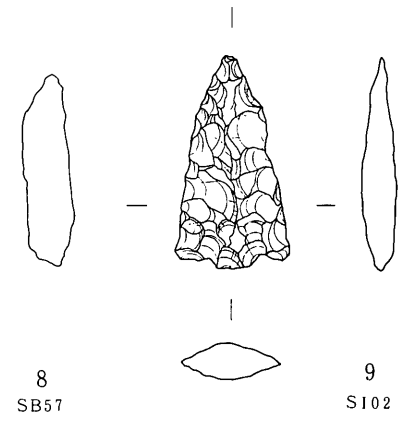
6
グリット



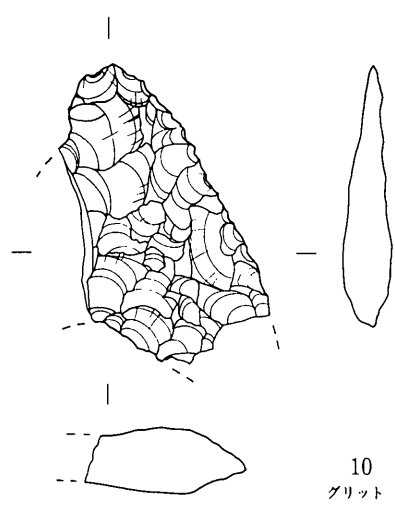
7
SB59



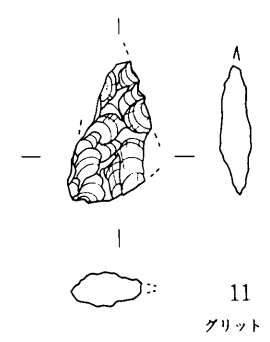
8
SB57



9
S102



10
グリット



11
グリット



挿図10 出土遺物(2)

第Ⅳ章 総 括

今次調査は、農道建設予定地という極狭い範囲に限られたもので、遺跡全体からするとそのごく一部に試掘抗をあけた程度のもといえる。その調査結果は本文中に記したとおりであり、前回の調査成果と合わせ、本遺跡の実体に深く迫るものとなった。平成8年度の調査では縄文時代中期を主体とする大集落が確認されたが、今次調査では縄文時代早期後半の、いわば集石土抗群ともいえる屋外での生業活動を示した遺構群が確認され、遺跡の占地の状況がより明確になったといえる。こうした成果に注目し、調査成果の到達点と課題についてふれ、今次調査の総括としたい。

1. 縄文早期後半の集石土抗群について

今次調査では土曾川を望む東向きの緩斜面で、約310㎡という狭い範囲から総数8基の集石土抗群、集石土抗に関連する土抗、炭化物・礫集中箇所が確認された。これらはいずれも縄文時代早期後半に位置すると推定され、集落以外での生業の一端を示す良好な資料と考えられる。集石土抗はその特徴から、蒸し焼き・石焼き調理の施設と推定されており、同様の集石土抗群が確認された遺跡としては黒田大明神原遺跡があげられる。黒田大明神原遺跡（飯田市教委 1997）では縄文早期前半から前期末にかけて総数28基の集石土抗が、時期毎に場所を変えながら集石土抗群が形成されており、その形態分類及び使用過程が推定されている。本遺跡の集石土抗をこの分類に従えば、掘り込みがあり礫及び炭化物を多数含むA類が2基（集石土抗01・03）、掘り込みを持ち礫が散漫な分布を示すB類が4基（集石土抗02・06・08・09）、掘り込みを持たず礫が分布するC類が1基（集石土抗04）A類とB類の中間的なものが1基（集石土抗07）となる。上記の分類に今次調査の成果を付け加えるならば、A類は構成礫の総重量が150kgを越え、礫の中には重量10kgを越すものも見られ、集石土抗底面から上面にかけての土層は、焼土層→炭化物層→礫層の順となる。またB類については礫総重量が20～96kgで、土層はA類と同様な傾向を示すものの、焼土や炭化物の濃度が減じる傾向にある。黒田大明神原遺跡で論じられた使用過程は、A類→使用直後或いは造営直後、B類→使用後あるいは廃棄後とされているものの、今次調査の結果では、A類の土層断面から、集石土抗の使用過程として、掘り込み内部の加熱（焼土層）→礫の加熱（炭化物層）→本来の目的（調理）が推定され、A類については使用直後の形態と考えられる。また、底面に焼土の見られた土抗（SK182・183）もこれらの1過程を示す可能性がある。しかし、B類はA類に比し構成礫数が減じており、炭化物層なども薄い特徴がある。礫の多寡は自然営力も推定されるものの、礫の再利用を示す可能性もある。E類とされた大型の礫を底面に敷く形態の集石土抗は確認されておらず、この形態を持つ集石土抗が、他の集石土抗と、時期・目的の点で異なる可能性を示している。

一方、炭化物・礫集中箇所は、破碎礫をはじめ赤化した礫が多量に散布し、炭化物も平面的に堆積する特徴を持つ。調査区内での位置は、集石土抗の集中する箇所の下方にあり、斜面を利用した炭化物・礫の廃棄箇所であった可能性を示している。

今次調査では、集石土抗内・土抗間での礫接合作業を行わなかったため、集石土抗の廃棄後の様相・礫の破棄と再利用などの点で詳細なデータを示すに至らなかった。しかし、調査区内の様相が、小河川に面したテラス状の緩斜面での生業活動を示す良好な資料と言える。

2. 出土遺物について

今次調査で出土した遺物は少なく、主に縄文時代早期後半の条痕文系土器（挿図9）がその大半を占める。いずれも胎土に繊維を多量に含み、内外面に条痕調整の見られるものもある。器形等は不明であるが、底部は平底を呈す。同時期の遺物が出土した遺跡としては、前述の黒田大明神原遺跡・美女遺跡があげられる。いずれも小河川に面した段丘面端部に位置し、集石土抗等の遺構が確認されている。その他の時期としては、前回調査地点と同様な縄文時代中期の土器片（挿図9-30～33）、小破片のため図示しなかったが、古墳時代と推定される須恵器片も1点確認されている。石器には扁平砥石（挿図10-2）・石鏃（挿図10-7・9・11）・石匙（挿図10-8）などがみられ、縄文早期から前期的な様相を示している。

3. 結語

今次調査の結果は以上のとおりで、遺跡のごく一部を調査したにもかかわらず、前回の調査区と合わせて、いわば大門原遺跡を南北に横断する形の調査となった。このため遺跡内での時期別変遷を追うことが可能と思われる。この大門原遺跡では、縄文時代早期から遺跡南端の土曾川沿いの段丘端部で生業活動が始まり、縄文時代中期初頭には一転して南大島川沿いの段丘端部に集落が形成され、縄文時代中期中葉から後葉には、段丘中央部分に飯伊地区屈指の大集落が営まれたことが判明した。しかし、弥生時代以降は生活の場になり得ず、集落の中心は東側に隣接する座光寺原・中島地籍に移動する。古墳時代以降の様相は不明瞭であったが、今次調査では須恵器片が出土しており、調査区東側には古墳（死人塚古墳）が存在したと伝えられており、古墳時代においても何らかの形で人々が関与した地域であったと言える。こうした新知見を加えることのできた今次調査ではあるが、調査の要因のふるさと農道整備事業を皮切りとして、周辺の開発が急激に進むことが予想され、遺跡の破壊は必至と思われる。このため、今まで以上の文化財保護の本旨に沿ったたゆまない努力こそ肝要である。なお、発掘調査に当たり、地元座光寺地区の方々・調査に携わったの方々には多大なご支援をいただいた。文末ではあるが感謝申し上げる次第である。

引用・参考文献

- | | | |
|----------|------|----------------|
| 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』遺構編・遺物編 |
| 飯田市教育委員会 | 1997 | 『黒田大明神原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1999 | 『大門原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 2000 | 『黒田大明神原遺跡Ⅲ』 |



調査区全景



調査区全景



S B 59



S I 01



S I 03



S I 06



S I 09



炭化物・礫集中箇所

図版 4



重機作業風景



委託測量風景



作業風景

報告書抄録

ふりがな	だいもんばらいせき						
書名	大門原遺跡Ⅱ						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
編著者名	下平博行・伊藤尚志						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL 0265-53-4545						
発行年月日	西暦2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
だいもんばら 大門原	いいだしぎこうじ 飯田市座光寺	2053 3	35° 32' 23"	137° 50' 27"	平成11年 9月29日 から 平成11年 12月1日	310㎡	ふるさと 農道整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大門原遺跡	集落	縄文早期	住居址2軒 集石土抗8基	条痕文系土器 石器	縄文時代早期後半に おける段丘端部の土 地利用の一端が判明。		

だいもんばらいせき
大 門 原 遺 跡

調査報告書

2001年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
長野県飯田市教育委員会
印刷 飯田共同印刷(株)
